



異	回	松
端	日	田
文	本	修
学	の	回



講談社

## 松田 修(まつだ・おさむ)

昭和2年大阪に生まれる。昭和27年京都大学文学部卒業。現在、国文学研究資料館教授。著者に「日本近世文学の成立」(法政大学出版局)、「日本芸能史論考」(同上)、「刺青・性・死」(平凡社)、「闇のユートピア」(新潮社)、「藤の文化史」(集英社)、「日本逃亡幻譚」(朝日新聞社)、「非在への架橋」(講談社)他がある。

## 日本の異端文学

昭和五十五年五月十日 第一刷発行

定価 一六〇〇円

著者 松田 修

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二/郵便番号一―二

電話・東京(〇三)九四五一―二二一(大代表)

振替・東京 八一三九三〇

印刷所 株式会社祥文堂印刷所

製本所 藤沢製本株式会社

©松田 修 一九八〇年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取りかえいたしません

目  
次

1 異端の原像 9

- 異端とは反主流派のことか——9  
「もと」と「すえ」——10  
本歌取りとは——12  
正統が死ねば異端も死ぬ——16  
奔逸の公分母——19  
「昔」にのみこまれてきた「今」——21

2 英雄放逐譚 23

- 古代建築の意味——23  
最初に土地ありき——26  
最初の英雄譚——28  
異端者から土地所有者へ——30  
兄殺しの英雄——31  
美少年の詭計——33  
女体による空間略取——34  
望郷の悲歌——36

3 知の異端者の誕生——記紀にみる人間造型 38

- 二種の言語——38  
文字なき国と文字の国——40  
虚構の透視者たち——43  
識字者の悲哀——46  
知の優越者の運命——51  
鳥羽の表——54  
渡唐をめぐる怪奇譚——56  
死の系譜のかけに——57  
転換期の知識人——48  
知ゆえの不幸——61

#### 4 述志者の没落

教養人の生活能力——64

賢才の評価者——66

詩文と和歌——70

橘正通の不遇感——72

異国の現世は理想国か——75

宮廷のサラリーマンたち——78

歌徳説話の数かず——81

64

#### 5 時代遅れの美学——和泉式部伝承

神とのかかわり——85

ほどこす肉体——87

性神秘儀——91

浮かれ女と母——94

85

#### 6 遁世のロジック

新中世に直面して——102

バランス感覚とその複合性——104

逆転・倒立の論理——106

捨てることのアナーキー——107

遁世と出家——111

個の矮小さこそ——114

熱狂の中の透視——116

102

7

異端の葬列

日本脱出——119

新しい英雄像の形成——120

貴族階級の異分子たち——123

大陸渡海の視点——126

民衆の夢——129

命あるかぎり——132

未練者の系譜——134

119

8

反俗の倒立世界

非命の茶人たち——138

反自然としての人工都市——140

共有の原風景——142

権力との対決——144

茶の湯の政治性——146

信長から秀吉へ——149

北野大茶湯——150

黄金の茶と佗びの茶と——153

利休の歪曲——154

癒着と破綻——156

138

9

残照の時代

言葉と文字の無力化——160

女文化の逆襲——161

知の収奪——165

権力に奉仕する知識人——168

知の孤独地獄——172

160

10

不孝者の血脈

- 孝の觀念の發生——177
- 子殺し譚の隆盛——174
- 子の犠牲死——182
- 不孝者の復権——184
- カインとアベル——187
- 悪人の悲しみ——190
- 不孝者・犠牲者として——194
- 異端者こそ被害者——196

174

11

少年愛の精神史

- 最初の同性愛者——201
- 罪としての友愛——203
- 同性愛とは滅びの愛——206
- 少年愛のゆくえ——208
- 愛の終る日——213
- 稚児ちごは神仏の化身——216
- 開かれた性愛——218
- 性の國家管理——221
- 若衆愛の実体——223
- 美は有罪である——226

201

12

反時代的視座——村上二郎論

- 丸山真男の哀辭——232
- 忘れられた対談——234
- 骨がらみの情念——238
- 陰湿柔媚こそ……——240

232



志士の文体——241  
自分の思想の殺しかた——  
244

パセイスト村上・終生の幼時志向——246  
永遠の「硬派」——250

あとがき

255

装幀／藤本 蒼

日本の異端文学



# 1 異端の原像

## 異端とは反主流派のことか

正統とはなにか、異端とはなにか。この一冊を書きはじめるに当って、私なりに、いちおうの見通しをつけておかねばならない。かつて鷲巢繁男氏と「異端と正統」というテーマで対談したことがある（昭和四十八年「詩と思想」創刊号）。そのとき、司会者の沢村光博氏が話したことであるが、若者たちに対して、「正統ということばに、なにをイメージするか」と問いかけたところ、即座に「主流派」という答がかえってきたという。芸術にとつての永遠のテーマ、「正統・異端」が、無媒介に、「主流・反主流」の図式によりみかえられているこの精神風土に対して、氏とともに一瞬のとまどいと苛<sup>いら</sup>だちを禁<sup>い</sup>じえなかつた。

たしかに文学の世界においても、このような現象的なよ<sup>よ</sup>みか<sup>か</sup>えが、しばしば見うけられることは事実である。日本文学史の流れにおける正統と異端とを、主流と反主流、多数派と少数派等々の視点からとらえることは、有効でないとはいいいがたい。

しかし、私は、むしろその有効性のゆえに、このようなルーティンワーク化した定点観測を否定し、日本文学の文学性そのものに即して、発問しなおすべきだと思う。言語遊戯めくが、それを古典と反（非）古典として、図式化してもよいだろう。主流と反主流といったよみかえと、同じレベルとは私は思わない。すくなくともそれは、文学領域の言葉なのだから。もちろん、古典・反古典の意味内容そのものが、あらためて問われることを前提として――。

### 「もと」と「すえ」

古典であれ、正統であれ、オーソドキシ（正統）を表現する言葉は、それ以上もうよみかえのきかぬぎりぎりのやまと言葉（日本固有の言語）は、いったいなにだろうか。

私一個の考えだが、それは「もと」（本・元）ではないだろうか。とすれば、ヘテロドキシ（異端）としてのやまと言葉とは、「すえ」（末）と違ってよいだろう。

「もと」と「すえ」は、一つの対極の概念であるが、けっして鋭く対立・対峙し、相互に否定しあうものではない。

それは、一枚の板の表と裏、一本の木の根と梢こぶすの関係である。相補的であり、相関的であるといえるだろう。

ここにはたしかに、一つの価値判断のヒエラルキーがある。それがイコール芸術としての価値

のヒエラルキーであるかどうかは問題としても、

西欧におけるキリスト教義による正統と異端とも、また中国における儒教的倫理思想から割り出した正統と異端ともちがって、本と末、二者のあいだには、敵対感情は、まったくくない。むしろ原始心性の世界に通底するような意味での価値の体系が見うけられるだろう。

かならずしも適切な例ではないが、今、手近な資料だけで、発言することにしよう。レヴィ・ブリュールの報告によると、つぎのような例があるという（ノルデンスキオルドが、インド人パレスの口から得た情報という）。

各呪歌は、用いられる治療の起源を語る呪禁を伴わなければならない。さもないと効力をあらわさない。

治療とか、治療の歌を効果あらしめるためには、植物の起源、即ち、それは最初の女から、どうして生まれたかを知らねばならぬ。

過去Ⅱ始源の行為の確認があつて、はじめて現在の呪歌が、治療効果をもたらしうるのである。日本の古代詩のかなり多くの部分に、このような意味での本・末関係を見出しうるだろう。

ある一定の状況に古代人が立ち、歌Ⅱ呪歌が要請されたとき、その歌Ⅱ呪歌を効果あらしめる方法はなにか。どうすればよいか。

過去においてもっとも似た状況を回想し、その状況において、かつて歌われた歌Ⅱ呪歌を復活させることである。

降靈された過去の歌、それは典型的には、神の歌であり、その聖性のゆえに、現実としての歌に、歌としての効果を約束するものである。現実の歌は、過去と重層することよつてのみ、存在しうるのである。いわゆる本歌もとうたと末歌すえうた、末歌による本歌取りの技法と伝統は、右のように理解されねばならないだろう。

### 本歌取りとは

本歌取りの源流は、一般的には、つぎのごとくに考えられているようである。

万葉集に、意識して古歌を作りかえて自分の今の心境を表わした歌があるが、そういうのに本歌取の萌芽ほうがを見出すことができる（和歌文学大辞典）。

このような理解もたしかに可能であるとは思ふ。しかし、本歌取りの原点は、「作りかえて自分の今の心境を表わす」というような、手段・方法という水準を超えているのではないだろうか。本と末との相補関係において、比重は、はるかに、本のほうにかかっているのではないだろうか。

もしこの関係を時間の軸に移せば、現在よりも過去にこそ、価値が見出されるだろう。過去と現在を繋ぐつなものは、おそらくは神聖な歌の記憶、歌による神聖な状況の記憶である。

本歌の「本」の意味は、究極的には宇宙観・世界観として説明されねばならない。

『よくにほん日本紀』所収の『伊予国風土記』に、もともと天上にあった天の加具山かくやまが、落下して二つに割きけ、一方は大和の天の香山かみとなり、他方は伊予の天山あめやまとなったという。

本 天上 天の加具山 一

天山(伊予)

末 地上

香山(大和)

二

本は過去Ⅱ始源であり、末は現在Ⅱ現実である。とすれば、この大和国、国としての大和は、じつは末である。末大和に対応する形で天上に本大和が想定できるのではないか。豊葦原とよあしはらの中つ国なかつくにそのものが末であり、高天たかまが原こそが本であったとも考えられよう。

このような考えに対して、手近な『神話伝説辞典』は、つぎのようにいう。

むしろ天上の香具山は、地上のそのの神話的投影なのであろう。事実大和の香具山は、宮廷関係の祭儀がしばしば行なわれた聖地であった。「天の」なる形容辞は、おそらく祭の聖物に対する修辭的付加語に過ぎなかったものが、後世になって、天上に同名の山があり、それが天降あめりついて、地上の香山となったというような推源説話が生じたのであろう。

神話学的立場からは、この逆外挿法的解釈は当然の解釈であらう。

日本文学Ⅱ文化史を貫く一つの原理としての本末観からいって、日本のアイデアの発想の一端が、ここからうかがえよう。

本と末、それは芸術的価値を超えた宇宙的価値観に属する民族的発想なのである。



本を使って、本を手段として、末が形成されるのではない。本はつねに、より重い。本への想起、本の適用、本の再生がなければ、末として生きてゆくことができない。

過去Ⅱ本歌が想到されねば、現在の歌も、それを生む状況も、存在しえない。

もちろん、このような考えかたは、すでに天の香具山で見てきたように、歌にかぎらない。物語についても、本物語と末物語というような理解のたてかたが可能である。

私自身あちこちに引用しすぎて気はずかしい例であるが、柳田国男は「米倉法師」において、つぎのように語っている。

さうして御伽の役の盲人などといふ者は、通例は旧話の作り替を以て能事とし、其聴衆も亦実は丸つきりの新作は好まなかつたのである。文芸の純乎として作者の創案に成るものを、つい近頃までの俗人は、「昇かいて除けるやうなうそ」と呼んで蔑あやしんで居た。大抵は今まで聴いて居た話を、もつと詳しく知りたい為に、作り替や後日譚の出るのを予期して居たのである。

演劇ではさらに端的にこの構造を読みとれるだろう。演劇の原基としての事件・行為Ⅱ本があつて、そのうえに、まねび（模倣Ⅱ演劇）Ⅱ末がくる。この基本的構造に重ねて、本演劇と末演劇の関係が見られるだろう（しばしば貶へ価的に評価される「きわもの」が、なぜ演劇の世界で執拗に生きながらえるのか。おそらくは「事件」が構造的には「本」に対応するからである）。

おそらくは、この本末関係こそ、日本のイマジネーションのもつとも根源的部分を占めている